毎日新聞
2012年（平成24年）2月8日（水）

世界の鼓動

田中 均

厳冬の京都を歩いて

文化と技量もって世界へ

上海に行くたびに成長の勢いを感じ、中国のダイナミックな未来を見る。この数年の間にも、景色は大きく変わった。

今や、上海は人口や地下鉄の延べキロ数で世界トップを争う大都市だ。滞在している日本人も10万人に達するとされ、日本人学校の生徒数などからみても、日本人が最も多く活動する外国の都市だろう。色彩も華やかで形状もそれぞれ個性がある高層ビル群を眺めて、上海がニューヨークやロンドン、東京などを超えて世界最大の近代都市となるのもそんなに遠い将来ではないと思った。

浦東地区にそびえる上海国際金融センタービルは、今日、世界で最も高い展望台をもつ建物だ。日本の森ビルが2008年に完成させた。内部では、上海の移り行く発展を時代ごとに示す写真や、1000分の1の精密な街の模型を展示している。森ビルは、同ビル周囲のコミュニティを巻き込み、環境にやさしい街づくりをしている。規模では他国を圧する中国だが、この国に欠けるソフトを日本企業が提供している格好の例だろう。

上海の熱気を引きずりつつ、久しぶりに京都を訪れた。生まれてから外交官となるまで22年間住み続けた地である。南禅寺の境内をしばし徘徊し、哲学の道を通り、銀閣寺を拝観した。幼少時代、毎日のように遊んだ下鴨神社にも足を延ばした。観光シーズンから外れて人影もまばらだったが、それぞれの場で新鮮な感動を覚えた。

南禅寺三門の、門を通して見える枯れた木々は、えもいわれぬ静寂を演出する。哲学の道は、私が京都に住んでいたころはまだ素朴な散歩道だったが、今はきれいに整備されている。すぐそばに迫り来る東山の深い木立は不朽である。紅葉はとっくに終わった厳冬の京都で、常緑の木々と枯れた木々の間に思いもかけず、赤をみる。玉水木の赤は、深い緑の中では鮮やかな色合いとなる。

そして銀閣寺。聞こえるのは外国語が多い。だが、白砂と木々の緑、水の音、そして銀閣の寂びた美しさは昔と何ら変わらない。下鴨神社も世界遺産に指定され、進み訪れる人が増えた。参道の周りに広がる糺の森は、私にとってラグビー・ボールをけり、野球をした遊び場だった。神社の白い砂利と朱の社も、糺の森に包まれて時代を超える。自然を取り入れ、自然の移り変わりの中でも色あせず輝きを放つ建造物。自然と一体化した、これほどまでの繊細さをもつ文化が他にあろうか。

画・onyx

日本が規模で世界を席巻することはもうあるまい。国内総生産（GDP）のみならず、自動車や家電製品が世界市場でトップのシェアをもつこともないかもしれない。厚生労働省の予測では、60年ごろまでに人口は3割減る。このまま、日本は衰退するのだろうか。

私たちが忘れてならないのは、繊細な文化を創造した日本人の豊かな資質である。文化だけではなく、高品質な製品やサービスで、日本が他国に劣るとは到底考えられない。エコカーや高品質な家電製品だけではなく、緻密な技術製品、食材や料理、アニメや漫画、ホテルやレストランのサービスに至るまで、日本は高品質国家として強い競争力を有している。

そろそろ、GDPの大きさや量を求める日本から、質を追求する本来の日本に衣替えをするときが来たようである。日本は、大陸から文化を取り入れ、長い年月国を閉ざし、熟成してきた。日本が、本当の意味で国を開いたのはせいぜいここ数十年である。熟成した文化と繊細な技量をもって世界に出て行く時期が来ているように、私には思えるのだが。

（たなか・ひとし＝日本総研国際戦略研究所理事長）

＊毎月第2水曜に掲載します